

## 編集後記

世相はすっかりビッグデータの熱に浮かされている。深層学習、確率ロボットなどの黒船ならぬ黒箱がデータから夥しい価値を産み出す魔術のように一般誌でも紹介されている。データは集めるものから集まるものになったなどという言葉もまことしやかに語られている。要するにデータもそのモデリングも価格破壊が進捗し、データの構造に関する種明かしをしないコンサルテーションが商売として成立したということである。データは量より質、分析は公明正大にと信じて疑わない古典統計家には、まことに住み難い世になったものである。

最近、臨床試験データの研究用利用の仕組みの構築が国際的にも高まっていると官庁統計分野の同僚から聴き、久しぶりに古典統計家の血が騒いだ。その種の研究集会が決起集会として開かれたとも聴く。なぜ官庁統計の同僚が巻き込まれたかという点、データ公開には個人情報秘匿の問題があり、データの一部情報を隠す技術を官庁統計のデータ公開ではどのように実装しているかを紹介したようである。ヒトを対象とした医学研究から生じるデータ、特にWell-Controlled Clinical Trialからのデータは、超高品質・高価格のデータの代表である。確かに比較臨床試験のデータは、新医薬品候補物質の承認手続きが終了するとお蔵入りになることが多かった。何と勿体ないことだろうか。

質の高い小規模データを統合した中規模データベースを構築し、臨床研究に再利用することは大変魅力的である。しかし、実際には公表論文に記載された統計解析結果を統合するメタアナリシスに比べれば極めて少数である。少なくとも臨床評価刊行会が第三者として管理している800件以上の臨床試験データは、その種の統合研究にかつて使われたし、これからも活用の途はあるのではなかろうか？勿論、かつてはデータの統合には大変な労力がかかったことも事実である。この種の国際的取り組みが、もう15年早く盛り上がっていったら、ネガティブトライアルも含めて全て臨床評価刊行会で管理する臨床試験データも、もっと注目されていただろう。

そういえば、ヘルシンキ宣言も2000年改訂で出版バイアスを抑止するために、ネガティブトライアルの結果公表を勧告したが2013年改訂では義務付けへと変化した。これは、臨床評価誌発刊の辞の精神そのものである。時代が正しく変わることもあるとホッとするのは、年を取ったせいだろうか。

(椿 広計)